

「記・紀」により、封印された邪馬台国と葬られた出雲の国が、今蘇える

全④-1

社会医療法人 緑泉会米盛病院
「邪馬台国 in 南九州」を探究する会 会長

濱田 博文

■1. はじめに

古事記と日本書紀（以下、「記・紀」と略）や「魏志倭人伝」を、読めば読むほど深まる3つの疑問！

- ①「記・紀」に書いてあることは、改竄、粉飾の匂いが強いけど、どこが改竄・粉飾で、どこからどこまでが史実なのか？
- ②「記・紀」編纂者は当時一流の知識人であり、当然、中国の国史である「魏志倭人伝」の「邪馬台国と卑弥呼」は知っていたはずなのに、日本の最初の国史である「記・紀」（本文）には、なぜ一言も触れてないのか？
- ③「記・紀」に「出雲」のことが時々出てくるが、しかし飛び飛びの内容が、しかも輪郭淡く。そのように「出雲」を書く事で、「記・紀」は一体何を言いたかったか？

この3つの疑問が、私の脳裏からはずつと離れなかったある日、ふと思い付きました。そうだ、「記・紀」が書かれた以前の時代の事だけ書いてある本を読んでみたら何かヒントが得られるかも、と。「記・紀」は奈良時代に書かれたので、それ以前というと飛鳥時代、古墳時代（または大和王朝時代）、そして弥生時代、縄文時代に当たります。そのような時代だけが書かれている本はないだろうか、とその目で探したら、結構有りました。

それら（末尾に文献として掲載）を繰り返し読んだら、ヒントどころか、「記・紀」により封印された「邪馬台国」と葬られた「出雲の国」が、蘇ってきたのです！多数の本の中から納得した12編の、特に共感を覚えた日高氏、原田氏、梅原氏、山科氏の内容を敷衍して、他の8編を背景に、かつ私見も少しまじえて、皆様にお伝えしたいと思います。

■2. 「魏志倭人伝」（以下、「倭人伝」と略）とは

魏から西晋に移った歴史編纂官の陳寿が編纂した中国の正史である。AD280～297年頃に書かれ、その4～50年前の聞き書きが主体になっているが、魏の公式文書（特に魏の皇帝の詔書）を写したと思われる所もある。

「倭人伝」は、正史『三国志』中の「魏書」第30巻 烏丸鮮卑東夷傳倭人条の略称。東夷の中の7民族（夫餘、高句麗、東沃沮、挹婁、濊、韓、倭人）の中で「倭人条」が最も字数が多く、しかも他国より、文明的、文化的に描かれている（図1）。

さらに、倭国は魏の皇帝から金印を与えられたのに、他国は、銀、銅印すら与えられていない。これは当時、魏の政略的意味もあったにしろ、中華思想の中国からみて、卑弥呼の「邪馬台国」が東夷7か国の中では進んだ有力国であった証しだ（身びいきではなく、そういう書き方である）。



(図1) 三国(魏・呉・蜀)と7カ国の東夷

■ 3. どんな船で、往復したのか (図2)

古墳から出土した舟形埴輪（上；宮崎県西都原遺跡出土）のような準構造船は、中国では遅くとも前漢時代に出現していた。当時、中国大陸（特に江南）と倭は、このようなゴンドラ型竜骨舟か、もう少し大きい帆船（下；粗末な1本の帆船）での海上交易が活発だった。元水産庁漁船研究官の石井謙治氏によれば、古代の準構造船の遺物や残された風土記などから見て、全長30m、幅3m、乗組員30人、時速6km位の船は建造上可能だったのではないか、と。

4. 「倭人伝」の邪馬台国への行程

以下、現代語訳を【】で示す。その中の()は理解し易くするための著者の注である

「倭人伝」((帶方) 郡より倭に至るには海岸に循ひて水行す。乍南乍東し(倭)



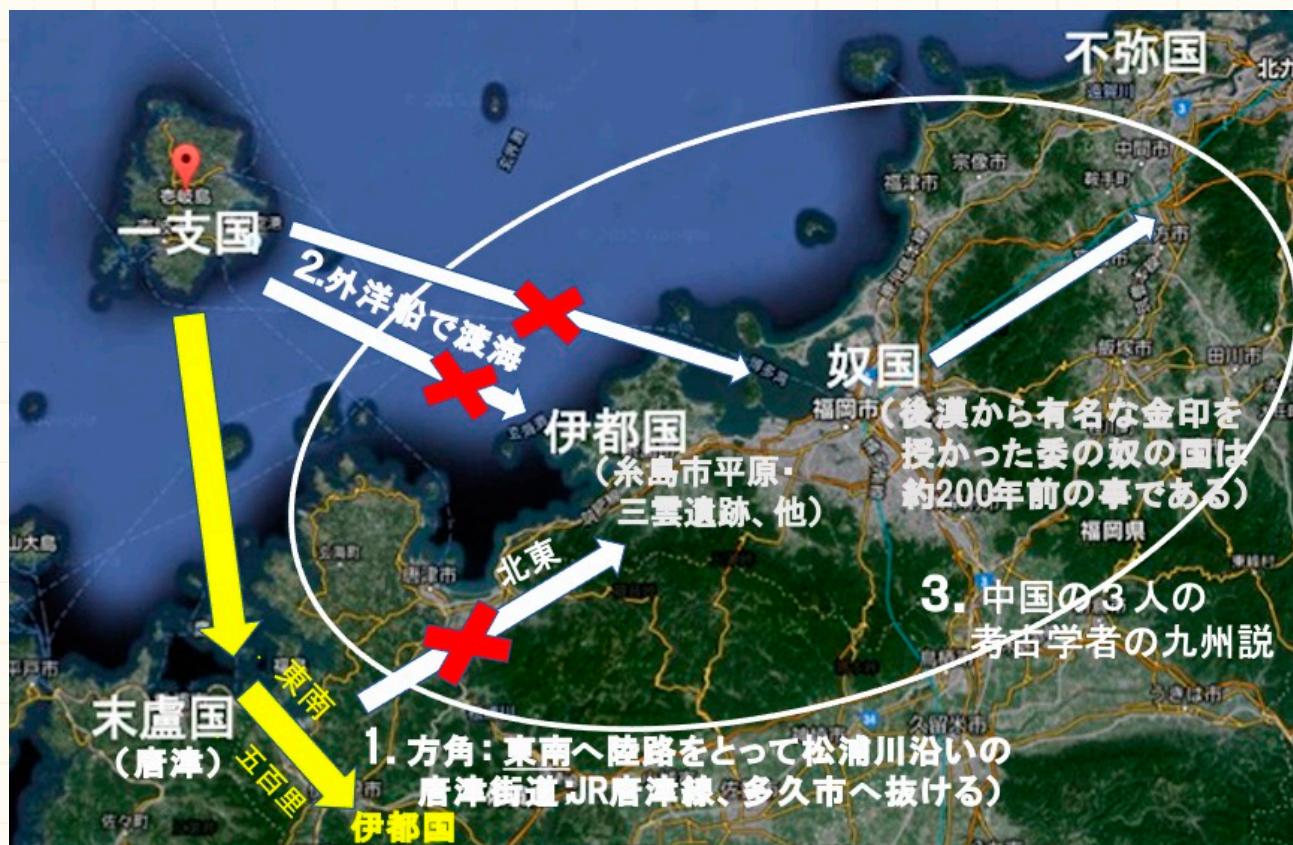
(図2) (上) 宮崎県西都原遺跡の舟形埴輪
 (下) 麻布くらいの粗末な一本帆の舟

の)北岸の狗邪韓國に到る。七千余里】(図3)。ここで水行とは沿岸航行の事である。沿岸航行の特徴 (石井謙治)。

- ①常に、自船の位置が陸上の目標物で確認できる。
- ②天候が悪化したらすぐ、島影、岬、湾内のような安全圏に避難できる。
- ③食料や水が隨時補給可能なので、貢ぎ物以外の物資をそう多く積まなくてもいい。したがってそれ程の大型船の必要はない。
- ④朝鮮西岸のような潮の干潮による流れの変化が激しい所では、順潮が利用できる。但し、逆潮の場合は潮待ちの必要がある。
- ⑤快晴・無風・視界良好・波穏やかな航行が常識。季節風が吹く冬場は航行しない。



(図3) 日本と大陸との航路 (弥生～古墳時代)：水行→渡海



(図4) 北九州の国々：【末盧国（唐津）から、東南陸行、五百里】

「倭人伝」【^{くわいじんでん} 狗邪韓國から始めて一海を渡り～対海国（対馬）に至る。又、南に一海を渡る、一大国（壹岐）に至る。又、一海を渡る、末盧国（唐津）に至る】（図3）。ここで海を渡る=渡海とは多少距離は違つても、船で、その海を一日で渡りきること。対馬海流は結構急な流れなので、それに抗して、日の入りまでに着かないと暗い海では目印が全くななく、危険を伴うからである。

「倭人伝」【末盧国（唐津）から、東南陸行五百里、伊都国に到る】（図4）

邪馬台国所在地の諸説：①畿内説、②宇佐・大分説、③北部九州内陸説、④南九州説。

ところが、①畿内説、②宇佐・大分説；方角や距離が「倭人伝」の記載に全然合わない。かつ渡海して来ているので、船でそのまま航行した方がずっと楽である。また某TV局の「邪馬台国特集」で、中国の各々別な機関に所属する3人の考古学専門家に、「魏志倭人伝」を読んでもらって、どの地域が妥当か？との質問に、異口同音

に「九州」と答え、さらに一人は「南九州」と答えていた。③北部九州内陸説：方角や距離が合わず、原文と相当無理がある。また「邪馬台国」の風俗は海浜国であり内陸国ではない。

「倭人伝」【（末盧国・唐津から）東南陸行五百里、伊都国に至る。千余戸（多久taku市）。東南奴国に至る百里。二万余戸（小城ogi市）。東行不弥国（佐賀市周辺）に至る百里千余戸。】

末盧国（唐津）から、東南陸行は、すなおに文字通り東南へ陸路をとれば、松浦川が流れしており、今は唐津街道やJR唐津線が走っている。そして脊振山系を横断して有明平野の山裾にある今の多久市へ抜ける（図5）。

ところで、邪馬台国にとって伊都国は重要な拠点であったようで、以下、かなり詳しく説明されている。

「倭人伝」【（伊都国は）郡使常に駐する所なり。官一人、副官二人。千余戸。】他の国々は、一様に副官一人であるのに



（図5）【東南陸行五百里、伊都国に至る。東南奴国に至る、百里。東行不弥国に至る、百里。】

(邪馬台国は3人), 伊都国だけは副官二人で、副官が増えている。ところが戸数は逆に千余戸と、他の国々の中で最低クラスである。次の一大卒の説明とも併せれば、伊都国は行政（官庁）都市と思われる。

「倭人伝」【女王の国（日向）の以北には、特に一大卒（監察役）を置き、諸国を検察せしむ。諸国之を畏憚す（恐れる）。常に伊都国に治す。魏國に於ける刺史（官名）の如くあり。（邪馬台国）王が使を遣わして京都（洛陽）や帶方郡、諸韓國に詣り、及び（帶方）郡使が倭國に詣るに、皆津に臨みて、文書、賜遺の物を搜露し（あらため）、伝送して女王に詣らしめ、蹉錯する（ごまかす）を得ず（ことができない）】

皆津に臨みては重要な語句で、皆（いつも、この一大卒が伊都国から）津（港）に臨みて（出かけて）、という意味で、一大卒は普段は伊都国に駐在していて、用事があれば港（唐津）に行って役目を果たす、ということである。

邪馬台国は、結構遠方にあるからこそ伊都国を行政（官庁）都市にして、大役の一

大卒（監察役）を置き、監察業務を行わせる必要があったことを示している。唐津は、いわば外港に当る。

ともあれ邪馬台国の政治・外交はだいぶ整備されていたことが伺える。

さて、弥生時代（後期）の有明海の海岸線は佐賀市周辺を走っていた。従って、不弥国（佐賀市周辺）に、当時の船着き場があり、有明海に出ることができた（図6）。

「倭人伝」【（不弥国から有明海に出て）南、投馬国（熊本平野）に至る。水行20日。五万余戸】（図7）。

当時、五万余戸（一戸5人として25万人。中国特有の大げさ表現と考えれば10数万人）を養える土地は有明海沿岸では、今の熊本平野しかない。

古代の有明海の沿岸航行は、北部九州と南九州さらに南西諸島（外洋航行）を結ぶ幹線航路であった。

例えば、

- ①薩摩半島の万の瀬川流域の遺跡群、特に高橋遺跡および枕崎の松の尾遺跡は高価な貝輪の加工・中継地であった；貝の道（木下



(図6) 弥生時代後期の有明海の海岸線（不弥国＝舟着き場→有明海へ）

https://ereki-westjapanavi.blogspot.com/2018/06/blog_西方浄土筑紫嶋より



(図7) (不弥国から)【南、投馬国（熊本平野）に至る。水行 20 日。五万余戸】
筑紫、熊本、薩摩、日向と、九州を俯瞰する統一文明圏が分かる！
魏志倭人伝その他諸々をひもといて卑弥呼の都へたどりつこう FC2 Blog



(図8) 【南、邪馬台国(宮崎中央平野)に至る、女王の都する所。水行十日陸行一月。七万余戸。】
幹線道路：出水→伊佐→えびの→小林→（生目古墳群・宮崎）→西都 (Google. E)

尚子, 法政大学出版局)。

②長島や宇土の多数の古墳の存在

③奈良時代に鑑真和尚が薩摩半島の先端, 秋目に漂着後, 有明海を北上して大宰府に着いた, など枚挙に暇がない。

「倭人伝」を, さらに続けて【南, 邪馬台国(宮崎中央平野)に至る, 女王の都する所。水行十日陸行一月。七万余戸】(図8)

Google. Eで辿れば, 今の幹線道路が出水→伊佐→えびの→小林→高原→生目古墳群・宮崎→西都と続いている。古代も同じような道を約1ヵ月, 魏国の皇帝からの数々の下賜品を背負ったり持ったりして進んだのだろう。

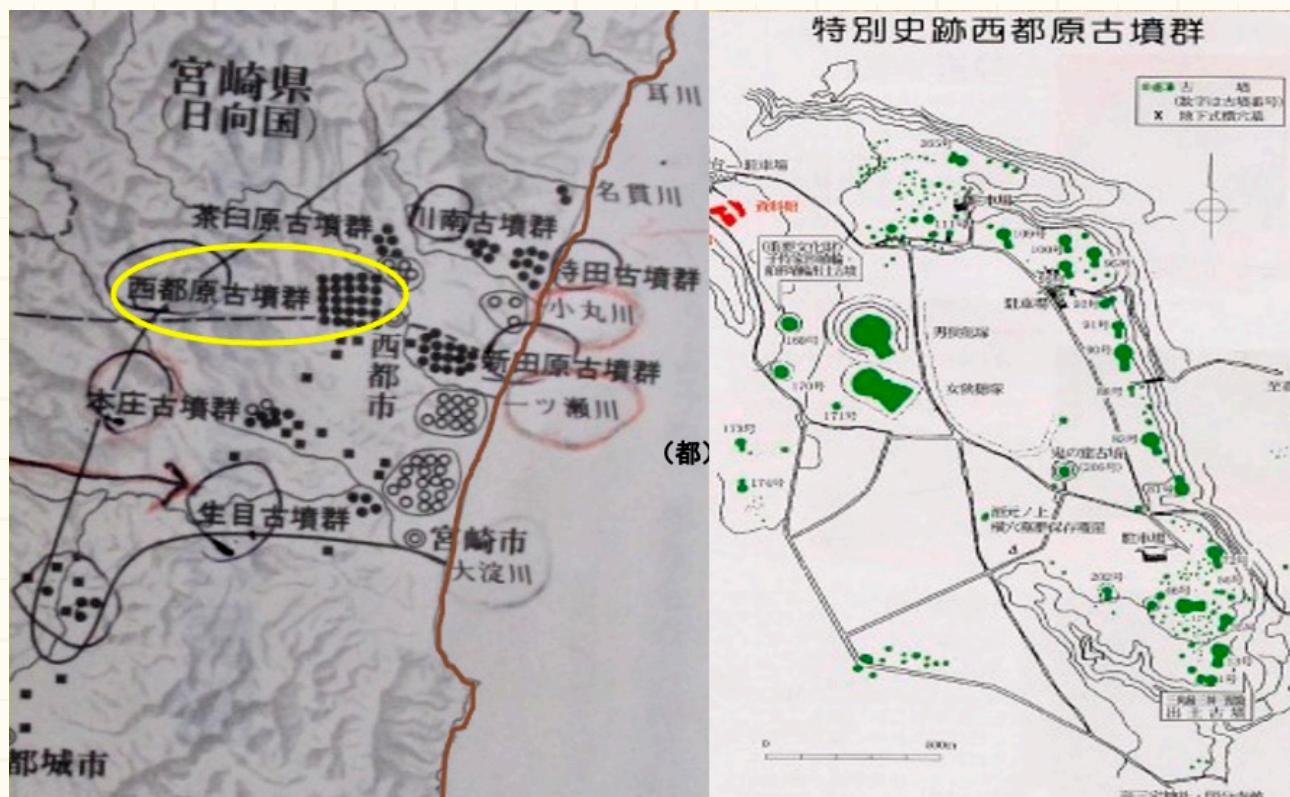
なお, 水行20日, 10日並びに陸行1月は, 長すぎると問う人もいるかもしれない。しかし皇帝の使節一行がわざわざ「邪馬台国」まで来るとなれば, その途中で接待饗応が十分計画的に何回も行われ, その度に数日は留め置かれた可能性がある。また悪

天候の日の行進は何日間は休止せざるを得なかっただろう。そういうのも含めた古代の日程(水行・陸行)であったと思われる。

宮崎中央平野は, 小丸川, 一つ瀬川, 大淀川が広大な沖積地を形成し, 西都原古墳群を中心に, 川南古墳群, 持田古墳群, 茶臼原古墳群, 新田原古墳群, 生目古墳群, 本庄古墳群などが, 数多くの住居跡と共に展開している。

総じて, 古墳1,600基以上, 前方後円墳350基余り(原初的柄鏡式前方後円墳も含む)と多種多様, かつその数の多さは九州随一で, 畿内と肩を並べる程である。日本でも有数の広域大古墳地帯であるという事は, この地域に長期間, 一大政治・経済・文化圏が古墳時代以前から存在していて, これだけの古墳群が形成された事を示している(図9)。

なお, 「倭人伝」【女王の都する所, 水行十日陸行一月】の水行から陸行に代わる地点を, 八代(→球磨川→人吉)としなかった



(図9) 宮崎中央平野の古墳群(左)と西都原古墳群(右)

(日高正晴:「古代日向の国」より引用)

理由は、紙数の都合で次回に回します。

また本稿は、筆者が、鹿児島史談会2022年11月例会で行った講演を、一部改変・編集し直したもので、全4回シリーズで完結する予定です。

引用文献

- 日高正晴：古代日向の国，日本放送出版協会，1993
 原田常治：記紀以前の資料による古代日本正史，同志社，1978
 梅原 猛：葬られた王朝，新潮社，2010
 山科 威：日本書紀・古事記編纂関係者に抹消された邪馬台国，諷詠社，2014
 安田喜憲：古代日本のルーツ 長江文明の謎，青春出版社，2008
 馬場悠男（監），島田栄昭（著）：「古人類」の謎學，青春出版，1998

野上道男：魏志倭人伝・卑弥呼・日本書紀をつなぐ系，古今書院，2012

豊田有恒：歴史から消された邪馬台国の謎，青春出版社，2005

橋口 学：完読「魏志倭人伝」，高城書房，2010

産経新聞取材班：神武天皇はたしかに存在した，産経新聞出版，2013

宮崎正弘：神武天皇「以前」，育鵬社，2019

高向嘉昭：鹿児島ふるさとの神社伝説，南方新社，2012
 他，割愛

原田氏が涉獵された 神社縁起，帝王編年記，石和聞見志書紀通訳，続日本紀，皇年代略記，延喜式神名帖，古今皇代図，続国史略，史料通信叢誌，旧事記，熊野略記，文徳実録，旧事天神本紀，後漢書，梁書，魏志倭人伝，國華万葉記，和漢三方団会，阿蘇郡誌，古事類苑，神祇部。各地の古墳の発掘報告書，各国風土記（逸文）、「古事記」以前の 1631 神社の資料。

他は紙面の都合により割愛。



ちかくにいるから、
チカラになれる。

いししん学資ローン 金利優遇キャンペーン



申込期限

令和5年3月31日(金) お申し込み分まで

対象者

開業医・勤務医

融資金額

5,000万円以内（総額5億円に達した時点で終了）

期間

最長20年



5年以内 1.75% → 1.65%

10年以内 1.95% → 1.85%

20年以内 2.15% → 2.05%

団体信用生命保険加入の場合は0.2%上乗せ

※詳しくはお問い合わせください

鹿児島県医師信用組合

〒890-0053鹿児島市中央町8-1
県医師会館1階

お問い合わせ先

099-251-3821

受付時間 /9:00～17:00 (土日祝は休み)

鹿児島県医師信用組合

